

一軍隊に三年五カ月、抑留二年一カ月、すなわち五年六カ月の空白。昭和十七年以前の東京荒川の会社は空襲のため再就職出来ず、郷里の両親のもとで農業の傍ら味噌製造業。後、修善寺駅前地区に店舗を構え（三十年八月より）現在に至っている。

私の軍隊とシベリア抑留

静岡県 齋藤 肇

伊豆半島の中央部天城山の北麓、『伊豆の踊子』で有名な川端康成執筆の宿や井上靖の出身地の湯ヶ島温泉郷の天城湯ヶ島で、大正十三年二月十五日に祖父母と父母の四人暮らしの家庭で長男として生まれ、後に七人の兄弟で家族は十一人の大所帯となった。農業の傍ら、父は林業で木材の伐採を生業として一家の暮らしを立てていた。

昭和五年、小学校へ入学して間もない六月二日、昭和天皇が天城山八丁池へ行幸された折、新築された小

学校へ往復立ち寄り休憩された。玉座は二階一室になり、高学年の掃除当番だけしか入室出来なかった。

昭和十三年三月、湯ヶ島尋常高等小学校卒業。

昭和十四年三月、大仁准教員養成所修了して国鉄の採用試験に合格したので東京、川崎市小倉の東京鉄道局新橋運輸事務所新鶴見検車区へ勤務した。当時東洋一の貨物列車の操車場で、構内は南武線と平行して尻手駅から矢向駅、鹿島田駅を経て平間駅まで延長四キロメートル・幅二百メートルの広い駅であった。中程に駅の本屋と機関区検車区があり、上り下りの到着した列車を一両毎切り離し、行き先別に分け新しく列車を編成するところで、検車区は到着した列車の検査と新しく編成された列車の出発検査を一昼夜交替で担当し、その他四十日定期検査と六カ月定期制動検査があつて、期日が来た空車は検車区の引込線へ入る。私は四十日検査の担当で殆ど日勤だった。支那事変から大東亜戦争に必勝の決意で戦時輸送に励んでいた。

昭和十九年正月適齢検査を受け、工兵甲種合格で入隊の日を待ったがなかなか通知が来ない。一緒に検査

を受けた者は先に入隊して、同級生二人しか残らない。後で解ったのだが、検査の折徴兵官に差し出した職場からの封書が入営延期願이었다そうさ。

サイパンが落ちてB29の本土空襲が日毎に多くなつた二十年一月下旬、父が突然職場へ現役徴集の知らせを持って迎えに来た。直ぐ職場へ手続きと挨拶をして寮の荷物を纏めて送り、実家へ帰つた。現役徴集の内容は、二月八日午前八時和歌山県海草郡深山中部第七十五部隊へ入隊との令状だつた。

二月五日の夜、入隊祝を自宅で、職場の同僚も遠くから駆けつけてくれ、近所や親戚の人で盛大な宴会で送ってくれた。

二月六日の朝、雪が五センチほど積もつて寒かつた。住み慣れた故郷を後に大勢の人に見送られ勇躍出発した。三島大社へ集合し、三島駅より大阪行きの普通列車で夕方出掛けた。大阪で朝を迎え、南海電鉄で深山駅で降りると、部隊から案内の係官が出張して受付で宿泊所を割り当ててくれた。自分は父と弟が部隊まで送つて来てくれたので同じ宿で頼んだ。その晩一

緒に入隊する同僚に兵科を聞くと砲兵と言う。他の一人は通信で、明日の入隊の兵科が各々混じっているのに変に思った。

二月八日晴れの入隊だ。七時まで支度をし、部隊まで十五分徒歩で行き営門で待つ。三十分前に開門して、家族と別れ入隊者は一斉に営内に入り指示を待つ。八時になつて係官の呼び出しで兵科毎整列する。全員で二百人ぐらい入隊した。係官の誘導で各中隊へ分散して行つた。その日は身上調査と注意事項を聞いて休む。

二日目新しい被服を受領し一ツ星の襟章を縫い付け、糸で名前を縫い付け、着替えて私物を梱包して家へ送り返す。三日目に身体検査と三種混合接種をして、半日就寝可が出て寝る。

四日目は紀元節で休日だが色々用事があつた。家を出る時部落の先輩の安藤軍曹が二中隊にいると家族から聞いて来たので許可を受けて面会に行くと、今日は外出してこのミカンを沢山買って来たといつて御馳走になり、故郷の話に花を咲かせた。その頃、黒河省

孫呉へ派遣されることを知った。

入隊して七日目、満州へ出発する日が来た。輸送指揮官の号令で中部七十五部隊を後に、深山駅より大坂へ出て軍用列車で下関へ向かった。夕方暗くなった頃宿へ着き、夕食に出されたフグの刺身に舌鼓を打つ。

食後引率されて町の浴場へ行き、入隊以来初めての入浴で体が清々とした。明日の乗船は早いので帰って直ぐ休む。

翌朝三時半起床、支度をして朝食を済ませ四時半出発、港まで急ぐ。大きな客船が岸壁に待機していて直ぐ乗船する。どこから集結したかたちまち満員となる、何千人乗船したか分からない。後で聞くと九千トン級の船だそうだ。もう一隻は門司より出港して沖合で待ち合わせて、駆逐艦と偵察機の護衛で敵の潜水艦を警戒しながらジグザグ航行で釜山に向かった。玄界灘へ出ると波が高く、一万トン級の前を進んでいる船が見えなくなる。船酔いの人が続出した。普通なら八時間で着くのに十時間かかって午後三時頃釜山港へ着いた。下船して直ぐ列車に乗るところ、港近

くの大きな劇場か映画館風の建物へ入り、外部の人員を避け夕方軍用列車が出発するまで缶詰めになって潜んでいた。日が落ちて暗くなる頃列車に乗り込み、夜行で朝鮮半島を縦断し、朝、鴨緑江を渡り満州へ入った。

かつて日露の戦で激戦のあった遼陽、奉天を通過して広漠と広がる原野を列車は北へ北へと驍進する。関東平野の広さなどは足元にも及ばない。家の隣のお祖父さんは静岡連隊の歩兵で、日露の戦に出征して激戦の末遼陽を落とし北の鉄嶺まで遠征した話をよくしてくれたのを想い出しながら、この辺りが戦跡かと當時を偲んで通って行く。満州の夕日は、話には聞いていたが、地平線に沈む太陽は盞さんのように大きく、真っ赤に辺りを染めた景色は実に雄大で綺麗だ。

二月の満州は厳寒だ。まして北滿は零下三十度以下になる。四平の駅へ着いた時、昼食の弁当受領に列車を降りて駅舎まで行くと、外気温零下二十度もあろうか身を切るような寒さで、各隊毎分けてある弁当とお茶を受け取り車内へ運び皆に分配が終わって昼食にす

る。豚肉の炊き込みご飯が折の中で凍っていた。飯のアイスだ。それでも腹が空いていたので少しずつ碎いてコリコリと音を立てて食べた。

列車は長い運転で疲れたのか動かない、釜山を出て今日で三日目になろうか、目的地到着の時間調整か、それとも単線で対向列車の待ち合わせか、三時間休んでようやく列車が動き出した。この辺りから列車の速度も遅くなった。小興安嶺の坂道でも上っているのだろう。

夜の点呼の後、輸送指揮官の通達で、明朝四時目的地の北孫呉駅に到着するので身の回りの整理をするようにとのことだった。夜中に北安の駅に停車した時防寒具を持って部隊から迎えに来てくれて、車内へ皆で運び込み、防寒帽、防寒外套、防寒靴、大手套、防寒頭巾を各自受領して車内で着装し、列車の到着を待つ。外は真っ白に雪が積もっているのが良く見えた。

予定通り四時に到着して全員下車、駅前で点呼を行い各々の部隊へ分かれて出発する。我々の工兵隊は七十五人で、迎えに来てくれた上官の指揮で屯営まで行

軍した。早朝の暗闇の中、真っ白な雪道はどこが道やら溝やら暗くて分らないので、ただ前の人の背中を見て後から付いて歩く。マスクをしているので息が睫毛に掛かり凍って前が見えなくなり困った。

部隊まで約三キロメートルあった。未だ夜明け前、指揮官の号令で歩調を取って衛門をくぐり衛兵司令に報告し、前もって決められた中隊に二十五人ずつ分散して、自分は第二中隊で、初年兵は一個班に纏まり教育を受けた。

孫呉は北滿の黒河より南西百キロメートルに位置して十キロメートル四方を小興安嶺の山並みに囲まれた盆地で、中央に幅二百メートルのソンピラ川が西から東へ流れ、川の南を南孫呉、北側を北孫呉と言い、北孫呉駅近くのコンクリート大橋と南孫呉駅近くの大橋が南と北の連絡道となって北側の山陣地が構築され、この盆地に一個師団が北滿の警備に当たっている。

北孫呉に師団司令部、陸軍病院、東京の歩兵第一連隊、千葉の歩兵第四十八連隊、赤羽の工兵連隊、野砲連隊輜重隊、通信隊、南孫呉に兵器廠、野戦貨物廠と

発電所があり、十八年の動員前は飛行隊、戦車隊、騎兵隊があつて兵力火力も充実していた師団だった。

我々が入隊した部隊は満州独立工兵第九七〇部隊で、十八年に動員され、主力はサイパンへ征き、一個中隊が留守部隊として駐屯していた。部隊長二階堂少佐、第二中隊長飯田中尉、中隊事務係前田軍曹教官、折田見習士官、助教兼班長に林忠輔伍長、助手忍田兵長で教育が始まる。

入隊して身体検査や被服の受領が終わり、七日目頃から内務班の教育も厳しくなり、毎日のように注意され全員がビンタを受ける。班長も厳しかったが、初年兵係に上靴ビンタや帯革ビンタで一週間ぐらい顔が腫れるほど殴られた。演習から疲れて帰ると整頓棚の整頓が悪いと木銃でバラバラに荒らされて、泣く泣く丁寧に厚紙を中へ入れて積みなおした。寝台の敷布が汚れていると赤いチョークで金魚の絵が書いてある。金魚が水を飲みたいと言っていると。一人でも悪いと全員が汚れ具合に比例して大きな金魚を書かれ、そんな時はまた、対向ビンタであつた。その時も相手を軽く

殴ろうものならこうして殴るのだと力いっぱい往復ビンタをされた。こま鼠のように動いてもどこかに落ち度がある。兵器手入れは勿論、部品を落とすと銃に謝り捧げ銃をさせられる。軍靴の手入れが悪いと靴を口にくわえて各班回りをさせられる。ある時は柱へかじり付き蟬の鳴き声やウグイスの綱渡り等させられた。

一品検査の襦袢検査で虱がいた者が二人見つかり、全員上半身裸で舎前に整列し不動の姿勢で立たされたことがある。零下二十五度では一分間で素手の指先、鼻、耳等血色がなくなり凍傷になる。一人一人殴られて舎内に入り、翌日ドラム缶へ湯を沸かし消毒した。煙草を吸う暇がないので厠で吸って煙を見つければ、大声で「火事だ」と叫ばれてバケツで水を掛けられた者もいた。昼間演習へ出て休憩の時間の煙草の味が忘れられない。

五月になると在満の現役兵が入隊し、続いて六月に在満の補充兵が召集で入隊し、中隊の兵員も増加した。

六月半ば第一期の検閲が行われ、戦車肉迫攻撃と橋

爆破演習で、宮庭より一キロメートル前方に架かっている南孫呉大橋で、爆薬は模擬火薬で百グラム火薬十

箇を導爆索で填列した爆薬を、横一列の柱の数だけ兵が持つて中央部橋脚列へ忍び込み、一人一本の柱を受け持ち、持つて行った火薬を上流の柱は一番高く次々と低く巻き付け、導爆索を上から次々と結束し、導爆索を結束した導爆索を最後に結束して準備完了、点火者と補助が残りの者は後方へ退避する。指揮者の合図により点火。導火索は五センチしかない、急いで後方へ退避しなければならぬ。検閲も終わり、濡れたまま帰營し部隊長より講評を受けた。

六月の末、朝鮮の現役兵が大勢入隊して部隊の兵員は膨張した。

四月の中旬に内地の友人より慰問の手紙が届いて、三月にB 29の大空襲があり勤めていた構内も被害を受けたが、直ぐ復旧して輸送業務に励んで本土決戦に備えて頑張っているという便りだった。

今まで戦局の様子も何も分からなかったが、ソ連軍がシベリアへ移動して時々スパイの信号弾が打ち上げ

られ緊張の度を高めているということだった。それで兵力の増強に召集していることがわかった。

七月三日、林班長に三人呼び出された。村田、矢島、斎藤、お前達三人は入隊以来成績優秀につき七月一日付をもって一等兵に昇進することに決まったので早速襟章を着け替へ中隊長へ申告に行ってくるよう命じられ、被服係に新しい襟章を貰い着け替えて三人で中隊長へ申告し、折田教官、前田中隊事務係、班長の林伍長に申告して来た。同期兵より一足先に星を貰って、皆に祝ってもらうやら、羨ましがられたりした。

七月になると同期兵は陣地構築に花見山へ派遣され、七月二十日付で一等兵に昇進した。三人は屯營へ残り朝鮮から入隊した初年兵の面倒を見るよう命じられ、暑い中、演習も内務班も一緒に寝起きして衛兵にも勤務するようになった。

八月八日朝七時、非常呼集で舎前に整列、師団長命令で動員が下った。ソ連軍が黒河へ侵攻したので各部隊は決められた部所へ就けとの命令だった。中隊の伝令は陣地構築の兵員を屯營へ集結すべく乗馬で走って

行った。

編成も終わり自分は第一小隊第二分隊に属した。兵器、被服の受領をして背囊へ装具を纏め指示を待つ。

午後一時全員営庭に整列、出陣式を行う。「己の任務に邁進せよ、最後に各員の武運を祈る」との部隊長の訓示を受け、各小隊毎決められた陣地へ兵営を後にして出発した。我が小隊は東風山の歩兵一連隊の陣地を直指して行軍、一時間半で陣地へ到着、連隊本部の近くへテントを張る。侵攻してくる北面に自分の蝟壺を掘った。

十日の朝、命令を受け工兵隊の屯営へ引き返した。営庭に兵器廠から運ばれた野砲の十五センチメートル砲弾の山が幾山も積まれて、今から急造爆雷を作るといって野砲隊の軍曹が来て信管の抜き取り作業をしていた。大きな釜へ湯を沸かし信管のない砲弾の爆薬を溶かして、三十五センチメートル立方の木の箱を作り溶かした爆薬を流し込み、固まっから瞬発信管を取り付けると戦車肉迫攻撃の爆雷が出来るので急いで作るよう命令を受けた。手分けをして箱作り、湯沸か

し、箱へ流し込み、信管取り付けと分業にした。丁度火薬の鋳物工場だ。

その日の午後ソ連の爆撃機が低空で飛来、南孫呉の発電所を爆撃して去った。高射砲があれば撃撃したものをと悔やんだ。

夕方になって敵戦車が北孫呉飛行場方面へ侵攻して来た。北孫呉大橋は工兵隊によって砲弾を並べて爆破した。午後六時頃営庭の隅の架橋倉庫で夕食を食べていると、自分の他二人の者に敵戦車を迎え撃破せよとの命令が下り、急造爆雷を胸に三百メートル先の陣地へ一人一人分かれて待ち伏せた。戦車の大きい音が遠くに聞こえる、いよいよここで敵戦車と一騎討ちかと壕に潜んでいる時間の長いこと。その間に営庭に分散してあった山積みの砲弾を花見山の陣地へトラックで運搬した。二時間ぐらい経過したと思われる。伝令が来て、今から陣地へ引き揚げるから本隊へ戻れとのこと。三人は九死に一生を得て顔を見合わせて喜んだ。早速伝令と一緒に本隊へ帰り爆雷を返納する。取り扱いを誤れば爆発するので細心の注意が必要だった。急

いで装具を持って營庭へ出ると分隊毎整列して、分隊長に帰還の報告をする。

兵舎へガソリンを撒いて焼却準備が出来た頃二台の車へ分乗、營門まで出た時一齐に点火し、点火者を乗せて花見山陣地へ向かった。山の坂道で炎に包まれて真っ赤に燃え盛っている兵舎が何とも言えない淋しさだった。

途中には特火点「トーチカ」が幾つもあり、土で覆い偽装されている。この陣地は教育中見学に来た所で、少しはわかっていた。道路脇に砲台があって大きな要塞砲を据え付け、そばに直径三十センチの砲弾を山と積んであった。車でそこより十分行った所の工兵隊の本部のある花見山下で下車した。夜でテントも張れないので本部のテントへ割り込むことにした。我々が着くと炊事から夜食を出してくれた。腹が減っては戦は出来ぬと言って、いつも鬼のような炊事班長も今日は張り切っている。

遠くで大砲の音が聞こえる。黒河と孫呉の中間にある瓊瑠の旅団の仁丹陣地の戦闘だろう、一晚統いて眠

れない。

翌日、本部近くの木蔭にテントを張り装具を運び、本部の幕舎で雷管と導火線索の結束をしていたが、戦況の変化もなく毎日敵機が偵察に飛来、機銃掃射をして行く。昨日侵攻してきた戦車が気になる。歩兵部隊で戦車を攻撃して一台爆破したそうだ。

そんな状況の中、八月十五日の朝を迎えた。遠くで今日も砲声が聞こえる。点呼の後で、午後非常呼集があるのでその心算で陣地で待機せよとの命令だった。

正午過ぎ山頂の師団司令部に白旗が掲げられているのが見え、皆不安そうにその旗をみつめていた。

一時頃花見山の工兵隊は全員集合し整列した。部隊長が司令部で聞いた天皇陛下の詔勅を読み上げると全員がうな垂れてすすり泣く。断腸の想いで幕舎へ帰り、次の命令を待つ。

五十キロメートル前線の仁丹陣地では戦闘が続いているらしく砲声が聞こえる。工兵隊の高橋中尉は司令部の命令を受け従兵を連れて仁丹の司令部へ急行、陛下の詔勅を知らせ戦闘をやめるよう伝達すると、旅団

長はスパイと思ひ違い受け付けなかつた。中尉は伝達の責務が果たせず拳銃で自決、帰らぬ人となつた。従兵は泣く泣く引き返した。若い士官の中にも敗戦を悔やんで自決した人がいたと聞いた。

翌十六日は武装解除で、兵器一切を一カ所へ積み、陣地を後に屯営へ引き揚げた。工兵隊の兵舎は焼却したので、空いていた騎兵隊の兵舎へ落ち着いた。

ソ連の進駐も早く、戦が終わり三日目に兵隊が重機を持って外から営内へ向けて警戒していた。毎日四人ずつ交替で司令部へ行き次の行動の指示を待った。二十日ほど経つて黒河へ出掛けるというので支度をしたが中止となり、三十日目九月十五日出発した。約千人の隊列で、ソ連兵が付き添い西孫瑗街道を北へ黒河へ向かつて約百キロメートルの道程を歩くことになつた。

重い荷を背負っているので一日歩いても三十キロメートルが精いっぱいだ。途中の野営はテントを張らず天幕を地へ敷き、二人の毛布で一枚を敷き一枚を二人で掛け、寒いので体を寄せ合つて寝た。疲れている

ので朝まで一眠りで、起きると毛布の上に霜が真つ白に降りていた。昨夜は携帯食を食べて寝た。朝、飯盒へ二食分米を仕入れて携帯燃料で炊き、牛缶を開けて二人で一缶食べ、飯を半分食べて弁当に持ち、出発準備をして出掛ける。

歩いても歩いても山また山、小興安嶺の黒河へ通じる軍用道路を時々休憩しながら行進する。夕方適当な宿泊地で荷を降ろし宿泊準備をし、飯盒で三食分炊いて食事にする。毎日牛缶ばかりで野菜を食べたい。靴擦れが出来た者も多く、自分も治療して寝た。

三日目の朝を迎え食事をして出掛ける。歩行困難の者はソ連の車へ乗せてもらう。二日歩いたので六十キロメートルは来たと思う、あと四十キロメートル歩けばシベリア鉄道で帰れると元氣を出す。昼食をして一時間も山あいの道を行くと小高い山の上の仁丹の陣地へ出た。道端に戦車のキャタピラが飛んでいた。どちらの戦車かわからないが戦闘の激しさが窺えた。小高い頂上まで来ると五百メートル眼下に黒龍江の小さな支流があつて、架かつていたコンクリートの橋は中央

で破壊され、上流へ舟を並べて車の通れる舟橋を架けてあるのが見え、遙か遠くに黒龍江が見えた。陣地から下って舟橋を渡ると、ソ連軍の戦車やトラックが駐留して兵隊が川で水浴をしたり休んでいた。そこを通り過ぎ一時間ほど歩くと環璉の旅団の兵舎が左手に見えた。間もなく環璉の駅へ着いて休憩をとった。

付いて来た通訳がソ連兵と何か話していて、聞いてみるとここから汽車が走るので貨車へ乗って行くことになった。皆喜んで貨車へ分乗したが、なかなか動き出さないので貨車の中で眠ってしまった。そのうちに動き出して一時間も走った。夕方近く黒河の駅へ着き下車すると、駅の近くが黒龍江で岸辺に渡し舟の着く棧橋があり、舟の来るのを待っているとソ連兵が寄って来て腕時計や万年筆を強奪された者が大勢いた。舟が来て乗り込み対岸のブラゴエシチュンスクまで約一キロメートル、五百人ぐらい乗っただろう。この舟は戦車や兵隊、自動車を渡した舟だ。対岸へ渡り皆が集まるまで待っていると子供が棧橋近くへ見に来ていた。靴も履かないで跣で、着ている服もボロボロだっ

た。

その晩は街の中央の人の住んでいない四階建のアパート風の建物へ入り、食事をして宿泊する。

入ソ第一日目の朝、携行して来た糧秣も少なくなり分け合って食事を作り朝食を済ませ、朝七時駅へ向かって出発。三キロメートル歩いた所にブラゴエシチュンスク駅がある。シベリア鉄道の支線の終点で、この駅から汽車で内地へ帰れると思っていた。構内に停めてある貨物列車に分乗して発車を待っていると、予定が変更され、降ろされて街の郊外にある農場へ五十人行くことになり、約四キロメートル歩いて行った。倉庫の屋根裏へ荷物を入れトウモロコシを貰って空腹を凌いだ。昼から馬鈴薯掘りを組を作って手やスコップで残りのないように掘り、畑の中の所々に山にする。機械で掘った芋は土の上に転がっているので集めて芋の山を作った。作業が終わり帰る時に大きな芋を沢山貰って来て煮たり焼き芋にしたりして夕食にした。食事の時はスープを出してくれたので飯盒を持って貰いに行く。

七日間同じ仕事を繰り返して、次の日の午後農場を後にして駅の方へ帰る。汽車に乗って帰ると思つていると、駅を通り過ぎ二十分ぐらい行つた所に收容所があり、そこは鉄条網を高さ四メートルぐらいに二重に張つて、四隅の望楼に一人ずつ警戒兵が自動小銃を持って昼夜監視している。

宿舎は古いアバラ家で、ソ連の兵隊が侵攻の折宿舎にしたようだった。この收容所がブルゴエンチェンスク第一收容所で、二十三年の春ダモイまで忘れることの出来ない生活を送つた。

收容所へ入つて本格的な寒さが訪れた頃栄養失調で視力が衰えて鳥目になり、少し暗い所も歩けなくなつた。その頃熱発患者が続出した。流行性で次から次と枕を並べ高熱が出て唸つて寝ている。幸い自分は丈夫だったので毎日看病が続いた。水で冷やすのが忙しかつた。医務室はあつても薬がないので一番困つた。

そんな時、收容所では明日食べる糧秣が終わり、配給もなく、雑のう一杯の粟しかなかつた。止むなく警戒兵を頼んで五人で調達に出掛けた。調達と言つても

盗んで来るより方法がない。目的地は黒河だ。五キロメートルの道程があつて、黒龍江が凍つて氷の上へ鉄道を敷き満州の物資を貨車ごとソ連へ運び込んでいた時だつた。暗闇の氷の張つた黒龍江を警戒兵の後に付いて黒河へ渡つた。手当たり次第探していると運良く高粱の入つたカマスを見つけた。皆で先ず煮て腹へ入れて行くことにして、鍋に代わる物を探したが何もないので、潤滑油の入つた油缶の口を開け油を捨てて火を燃やし、缶に付いている油を火で焼き落とし、厚い氷を砕いて水を汲んで高粱を煮る。塩も入れないで五人は腹いっぱい食べて、カマスの高粱を背囊に詰め、また暗い氷の上を引き返し汗を流して收容所へ帰つた。往復で四時間以上かかつた。満足には運べなかつたが翌朝のスープになつた。

その頃栄養失調で死亡する者が多く、他の收容所から遺体が十体ほどトラックで第一收容所へ送られて来た。襦袢袴下だけで凍つていた。ソ連の軍医が解剖して研究するために運んで来たという。医務室のそばへ屍室を作り安置する。自分と衛生兵の二人でその遺体

をペーチカの上に四体立てて並べ、柔らかく溶けるまで火の番をした。今でもその時の気持ちを忘れることが出来ない。

二、三日経ってから墓掘りが始まった。駅の北の小さな丘に街のロシア人の墓地があり、その一隅に大きな穴を掘った。毎日交替で十人ぐらいつつ行った。凍っていて硬くてなかなか掘れない。ツルハシとバールで砕きながら掘り、帰る時は凍らないようにシートを掛けてくる。幾日もかかって掘り埋葬する。自分達の収容所でも幾人か亡くなって一つの墓に眠っている。故国に帰る日を夢見て遠い酷寒の異国で亡くなっていった戦友達を一日も早く故郷へ還してやりたい。

この街は、黒河の対岸に位置して黒龍江と支流のゼーヤ川が落ち合う三角州で、東西五キロメートル北五キロメートルの広い街で、北東の端にブラゴエシチェンスクの駅があり、鉄道が街の周りを一周して工場へ出入りし、駅前の広いメイン通りを中心に縦横に広い道路と生活道が入って、大きい工場は外側の線路の近くに多く、住宅は内側に平屋建てが多かった。人

口は少なく、若い男は兵隊に出て、女と年寄りが主力で荒廃した街を支えていたようだ。

工場が多いが、どの工場も動力に使う電力を発電しているので大きな煙突がある。アムールに面した川のほとりに大きな火力発電所があり街の電力を賄っているのので、大量の石炭が貨車で送られてくる。

収容所の隣に大きな製材所があり、毎日三十人ぐらい作業に行った。朝、作業の分担を決めて仕事に就く。ボイラーの石炭運搬、貯木場の材木をコンベヤに乗せ製材機まで送る、作業製品を板や角材に分類、トロッコに積んで倉庫片付けの作業、川が解けるとゼーヤ川の上流から筏で木材が着くので、コンベヤで二十メートルぐらいの貯木場へ揚げ積み込む作業をして、二週間ぐらいで交替して他の工場へ変わった。

三キロメートル離れた所に大きな製粉工場が四カ所あり、第一製粉工場から第四工場まであって、ウクライナ地方から送られてくる小麦を昼夜休まず三交替で製粉にして送り出している。

この四カ所の工場へ第一収容所から大勢の作業員が

出て働いていた。第一工場の生産は八時間に六十キログラム詰め二一〇袋、一日に七二〇袋四十三トン。交替者は決まっています、一週間ごと出番が変わって作業する。袋詰めが二人で、製粉された粉が大きなタンク二つへ落ちて溜まり、タンクの下部が袋の口の大きさになっいて、袋を掛けバンドを締めてタンクのハンドルを外し台秤ではかり目方の調節をしておく、ロシアのマダムが袋の口を縫う。そしてベルトコンベヤへ乗せ、倉庫の高い所から担ぐ荷台の所へ滑って来るので四人が片付ける。二四〇袋運んで六袋の十段が四山で一〇〇%だ。石炭運搬が四人いるので、交替する人が常時十人働いている。

第二工場も十人、第三と第四が八人ずつ、合計三十六人の三倍の人が交替し、ほかに麦の貨車が入ると麦降ろしや石炭降ろしと作業は多かった。

ほかに発電所の石炭運搬の八人ずつ三交替も冬は大変だったが、帰りにサウナへ入って来たので嬉しかった。二年目に宿舍も改築され、地下へ浴場も造り食事も改善された。

民主化運動が始まった頃将校はどこかへ移動し、二十三年五月、待ちに待ったダモイの時が来た。

【執筆者の紹介】

昭和五年四月 湯ヶ島尋常高等小学校入学

昭和二十年二月八日 和歌山県海草郡中部七五部隊入隊

二月 満州黒河省孫呉工兵一三四連隊

八月 孫呉陣地にて終戦

九月 ソ連ブラゴエシチェンスク第一

收容所

製材所、製粉工場、発電所、造船所、コルホーズ

昭和二十三年六月 復員

(静岡県 石川 博)